

# か た ら い

2026  
No.63

## みんなであつなぐ防災

### 特集

日常のつながり、暮らしの営みが  
災害時のちからになる

防災士 ヘルメット隊長 青木紘子さん



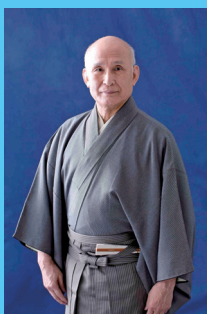
「火を消す」だけじゃない！  
改めて消防団とは何かを考える  
消防団第一分団 河合佑樹さん／福平恵一さん



### 特別取材

異文化交流から見える  
日本とタイの違い

宮川ラチャヤーさん



能楽の歴史を通してジェンダーを考える

—女性能楽師津村紀三子を師と仰ぐ津村禮次郎氏が語る能楽の歴史—

能楽師 津村禮次郎さん



令和7年度 男女共同参画シンポジウム報告  
第6次男女共同参画行動計画推進状況調査報告  
令和7年度 性の多様性への理解促進講座報告 ほか

# 「日常のつながり、暮らしの営みが災害時のちからになる」

【防災士ヘルメット隊長 青木 紘子さん】

さまざまな災害リスクを抱える日本での暮らしに、男女問わず誰もが安心して暮らすことができる備えとは何か、わたしたちが今日から始められる備えとは何か。小金井市在住の防災士・ラジオパーソナリティで、「地域交流と防災」をテーマに一度開催されている「梶野公園まつり」の運営にも携わる青木紘子さんにお話を伺いました。

◆活動の目的は、「防災について気軽に語りあえる場所づくり」

防災士、ラジオパーソナリティという肩書きで活動しておりますが、活動の目的は、「防災について気軽に語りあえる場所づくりをすること」です。

日本は災害も多いですし、自分が今の状態で災害があった時に果たして対応できるのだろうかという不安を抱えながら、それぞれ対策を考えていると思います。ただ、こうしたことをみんなと一緒に考えたり語り合えたりする場所や、協力し合える場所は少ないと考えています。

「防災の話だったら何でもいい」と思ってもらえるようなわかりやすい格好をして、いろいろなところ、例えば、PTAや幼稚園の父母会、小学校、高齢者のグループなどに出向いて、みなさんが今何を不安に思っているのかを聞いて、そこに合った対策についてお話しします。

それをきっかけに、そこに集まってきている人たちが同士が仲良くなれば、安心になりますよね。そういう場所、コミュニティづくりこそが災害時の安心につながると思っています。

◆東日本大震災での経験から知っていた地域コミュニティの力

私自身、東日本大震災の際、当時暮らしていたコミュニティの中で守られ、そういう話が気軽にできる関係があったからこそ安心が生まれたという経験があります。当時は市外に住んでいたのですが、社宅ということもありコミュニティがとてもしっかりしていたんです。例えば、どこのうちに小さい赤ちゃんがいるとか、どこのうちにはご出身が東北だから心配だとか、そういうようなことをみんながわかっている中で協力し合える環境に守られていたという気持ちがありました。とくに当時は、夫が災害時は真っ先に対策に駆け付けなければいけない仕事をしていたので、私が地域と繋がって

かなければならないという強い気持ちもありました。

そんななか、震災直後の2011年5月、急な夫の異動をきっかけに、住み慣れた社宅を出て小金井市に引っ越すことになりました。子どもがまだ3歳になるころで、知らない土地で、どうやって今までのコミュニティと同じように地域に馴染んで、災害時も協力し合える関係になれるだろうかということをもっと先に考えました。

◆「梶野公園まつり」をきっかけに防災士の資格を取得  
さらにはラジオパーソナリティに

小金井市に越してきてからは、子どもと一緒に、いろいろなところ遊びに行きました。なかでも近くにあった梶野公園によく行くようになり、最初はプレパークという子ども遊び活動に週に一度、ボランティアとして参加することになりました。これをきっかけに、公園の運営会議にも参加することになりました。そんな折、梶野公園で年に一回、防災のお祭りをやるので、企画をしないかというお話をいただきました。専門知識があれば、小金井の地域性もふまえた対策を考え、伝えることができるのではと思います、このことをきっかけに、2017年に防災士の資格を取得しました。

そもそも梶野公園は、さまざまな防災機能のある防災公園として、広く親しまれている公園で、一時避難場所としても



ラジオパーソナリティも務めている青木さん



梶野公園まつりでの活動の様子

昨年の「梶野公園まつり」は、残念ながら雨天中止でしたが、毎年どんな大きくなっています。昨年は、東小金井駅周辺のお店や、子育てや公園花壇などのボランティア団体、スポーツ団体などの約40団体が参加を予定していました。祭の目的は、災害のときに梶野公園で何ができるかをみんなで考えることがテーマです。

実は、ラジオパーソナリティのお仕事も、最初は「梶野公園まつり」の宣伝のために西東京市のコミュニティラジオ「FM西東京」の番組にゲスト出演させてもらったことがきっかけでした。現在は、月曜夕方5時から2時間の生放送「ひろがる！ダイナマイトマンデー」を隔週で担当しています。

### ◆梶野公園から地域に広がる防災の取組

「梶野公園まつり」がひとつのきっかけとなり、梶野町会に自主防災会が設立されました。梶野町会は、かなり広い世帯の町会ですが、これまで自主防災会はありませんでした。町内会は「梶野公園まつり」とも関わりがなかったんです。それが、コロナ禍で中止されていた町内会の夏祭りを梶野公園で開催することになったことをきっかけに梶野公園と町内会のつながりが生まれ、防災会がないことに問題意識を抱えていた夏祭りの運営メンバーが中心となって、2023年には梶野町自主防災会が発足しました。自主防災会には、災害対策に必要な備品の整備費用として、市から補助金が支給されています。

さらには、自主防災会が発足したことで、小金井第三小学校に避難所運営協議会が設立されました。避難所運営協議会は、町内会と、学校や学校のPTA、地



取材に応じる青木さん

域の商店会など、さまざまな関係者が集まって、避難所の運営について協議するものです。場所をどう使うか、動線はどうするか、誰が何を担当するのかということも市民自ら考えて計画しなければならぬので、さまざまな連絡系統の面から町内会自主防災会の主導が必要不可欠なものです。梶野公園を中心に、地域にさまざまな防災の取組が広がっていると感じます。

### ◆災害対策とは「個別」のもの 家庭によって事情はさまざま

小金井市には、都心に通勤、通学する方も多いと思います。都も、帰宅困難者の受け入れ対策を進めており、小金井市では宮地楽器ホールが帰宅困難者の受け入れ施設になっています。地震で自宅に帰れなくなってしまう時にどうするかというのは、とても大きな問題です。例えば子どものお迎えをどうするか、何日か帰れないならどうするか。帰れない人も、自宅にいる人も、それぞれがそれぞ

れの方で生き延びるための方法を具体的に考えておく必要があります。こういうことは、具体的に考え始めないと気づかない部分が多いです。災害対策って本当に、人それぞれなんです。万人に共通な対策だけで全てがうまくいくことはありません。それぞれの家庭に事情があるのですね。個別に考えていくしかないんです。ですからまずは、自分ごととして考えるために、防災についていろいろな人と話をするのが重要と思っています。

### ◆災害時には、それぞれが得意なことを 持ち寄って助け合うことができる

災害時に求められるのは、なにも人命救助にかかわることだけではありません。わたしたちは、毎日の生活を続けるうえで、さまざまなことを行っています。災害時には、一人ひとりが、それぞれの得意なことを生かせるのではないのでしょうか。例えば料理が得意な方、表にまどめたりスケジュールを立てたりするのが得意な方、アウトドアが趣味でテントを立てるのが得意な方、介護経験のある方、子育て中の方など。災害時にもそれがそのまま活かせる技術、ノウハウになります。

避難所生活はもちろん、在宅避難の中でも力を合わせられる場、仕組みを作りたいと思っています。さまざまな人が一緒に災害について話し合いを行うことで初めて気づけることもあります。男女問わず誰もが参加しやすい意見交換の場があることが大切だと思います。

### ◆明日からできる備えとは

ぜひ、近所のお祭りや防災訓練、町内会の会合など、いろいろなところに参加

してみてください。市民掲示板などにはいろいろなチラシが張り出していると思います。ご自分が興味のある集まりに参加してみてください。そこで繋がる関係がきくと、災害時にも心強い存在になってくれると思います。毎日災害のことばかり考えられないですし、だからといって他人事ではありません。日ごろの生活で築いているものすべてが、災害時に頼れる存在に直結するはずなんです。そもそも、自分から何か働きかけることによって生まれることってすごくワクワクすると思うんです。小金井市には参加できるものがたくさんあると思うので、まずは参加してみてください、自分の居場所を作っていただきたいな、と思います。



### 取材を終えて

わたしたちがそれぞれ日々の生活で築いている人間関係や生活力がそのまま災害時に頼れるものになる。当たり前のようで、多くの人を意識していかないのではないのでしょうか。防災対策を特別なことと捉えず、毎日の生活と結び付けて考えておくことが何よりの対策かもしれません。  
(真保)

# 消防団は「火を消す」だけじゃない！改めて消防団とは何かを考える

## 【小金井市消防団第一分団 河合佑樹さん・福平恵一さん】

今号は「防災」をテーマに掲げ、地域防災の担い手である消防団について取り上げることとなり、女性の消防団員が新たに加入した消防団第一分団を取材しました。

### ◆ここは秘密基地？

今回は女性消防団員の方からお話を伺うことになりました。

詰所の住所をお聞きしたのでパソコンのマップで確認してみました。武蔵小金井駅の横あたり。よく知っているはずの場所なのですが、建物の姿が一向に思い浮かびません。市役所を出発し、とりあえず連雀通りから消防署横の道を北にたどりまします。高架をくぐった先が目的地です。消防署の建物が思いのほか縦に長いと思いつながり、1、2分。「ああ、そういうえば、これだ」その場所に現れたビルを見た感想がこれでした。看板には確かに「小金井市消防団第一分団」と書いてあり、ま



第一分団詰所正面

ごうことなくそれなのですが、それにしても知っていないはずなのに指の間から砂がこぼれ落ちてしまうようなこの頼りなさはどうしたことでしょう。恐らく、私が日頃この場所を見て感じていたのは閉じられたシャッターと「駐車禁止」の字が放つ排他的なオーラだったのかもしれませんが。それは、とあるアニメでいえば人を撥ねつけるように働くATフィールドのようなものだったかもしれませぬ。

記憶の不確かさに不信を抱きながら、そうこうしているうちに第一分団長の福平さんが出てこられ、建物横の入口から中に招き入れて頂きました。45度もあるうかと思われる階段がいきなり始まります。ポンプ車を格納する車庫の高さを短い距離でこなすためには必要な角度なのでしようが、それにしても、これは少年のころに憧れた秘密基地のシーナリ、とあるアニメで言えばまさにネルフ本部への侵入です。

3階の指令室には碇司令とみさとさん。



取材に応じる河合さん(上)と福平さん(下)

もとい、分団長の福平さんと女性消防団員の河合さんがおられました。インタビュー勢が5名。それがどっと押し寄せたので、なにやら記者会見のようになっています。

### ◆そもそも消防団って

消防団を所轄する小金井市の地域安全課によれば、消防団は『自分たちの街は、自分たちで守る』という精神に基づき、消防署に勤務している消防職員とは異なり、生業を持ちながら、『地域住民の生命、身体及び財産を守る』ことを使命として、火災はもちろん、地震や風水害などの災害発生時には消火活動だけでなく、警戒活動や応急救護活動なども行っています」ということになるのだそうです。

消防団については昔から見聞きしており、よく知っていると思っていたのですが「消防署との違いは？」と問われ、これもまた指の間から砂がこぼれ落ちるがごとくに己の生半可を思い知らされる訳ですが、しかし今の若い人の間では消防団自体を知らない人も多いのだそうです。河合さんがそういうお話を切り出して下さいました。

うーん、すると、逆に、まだ大学生で知られる河合さんは、どのようなきっかけで消防団に入られたのか気になってきます。「小学校3年生の時から小金井の消防少年団、消防署管轄なのですが、それにずっと入っていて、もう長くて、10年以上ですかね、お世話になっていました」



消防少年団パンフレット(抜粋)

「消防少年団!!」パンフレットの一部を掲載します。「これは、まさに正義の少年少女たちではないですか!!」私がここを少年のころに秘密基地だと思ったのもあながち間違いではなかったかもしれませぬ。

「小学生から高校生までが団員として活動してきて、大学生になると、指導員として活動するんですけど。ちょうど大学生になったタイミングで、消防団の女性団員の募集が始まったので、大人の消防団に入ってみないかというお声掛けを頂いて、入ることにしました」

なるほど、消防少年団のカリキュラムでは「キッズ」楽しみながら防災を学ぶ」「ジュニア」同年代の防災リーダーになる」「中学生」指導力を高める」「高校生」地域の防災リーダーを補助する」となっており、大学生になった河合さんは晴れて防災リーダーのスタートを切ったことになるわけです。

### ◆消防団は「力仕事」だけではない

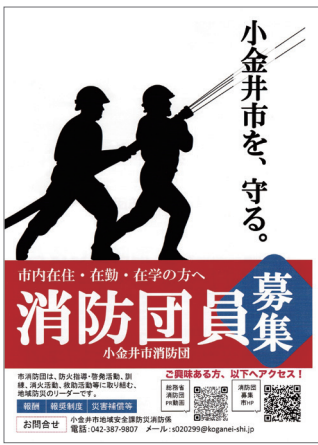
「消防と言えば、消火時の放水をイメージしますが、これは女性にとっては、なかなか大変じゃないですか？」消防団を火消しのステレオタイプで見ていた私は、女

性団員と聞いた時に一番気がかりだったことを河合さんに伺ってみました。参考に頂いた消防団員募集のチラシにもホースのシルエットが勇ましく掲載されています。

「こうやって、イラストとか写真とか見ると、火災現場に行つて放水しているイメージが強いですが、世間一般的には、女の子だし、無理だし、みたいなイメージもあっちゃうかと思うんです。でも、だからこそ、男女共同参画という視点から見ると、実はそうでもないよって伝えたいんです。もっと広報や防火防災に対する後方支援だったりとか、力仕事だけじゃない活動というのもあるかなと。火に立ち向かっていくだけのイメージを払拭できるぐらい違う活動にも力を入れていきたいなと思っています」

「けっこのな歳の私ですが、家がぼうぼうと燃えている火災は人生で一度しか見たことがありません。」

河合さんも火災の現場を見たのは2回だけだそうです。消防団といえども火災がそんなに日常的にあるわけではないんですね。確かに、昔に比べると耐火建築が増え、家がすっきり燃えてしまうような火災はそれほど多くはないでしょう。それと建物が高層化したことに伴い消防署の機能がアップし、そのため消防団の誰も彼もが「ホースを持って勇ましく」ということではない時代になってしまったのかもしれない



市消防団員募集ポスター

せん。

しかし消防団は「自分たちの街は自分たちで守る」という崇高な使命が現実化した姿であり、決して消防署と比べるものではないのです。そういう意味において、消防団は今新しい役割を担おうとしているのだと思います。

確かに、火煙が勢いよく上がるような火災はあまり見かけなくなりましたが、今、心に留め置かねばならないのは大規模災害への備えです。東日本大震災では、その物理的な被害もさることながら、被災者の方々が受けた精神的なショックや災害時における人々のネットワークのあり方が大きな問題になりました。「これは本音というか、私自身の思いとしては、火災の最前線に立って放水をして火を消すというよりは、女性だからとかじゃなくて、一個人として、救急、応急手当てだったり、精神的なショックなどを緩和する立場ができたかと思つていて…」

時代の要請をすでに感じ取つておられるかのような河合さんの言葉です。そしてご自身の役割があなたの中にもあるのだという覚悟のようなものが感じられました。

小金井市第7次男女共同参画行動計画では「防災組織における男女共同参画の推進」「避難者に対する男女共同参画の視点の反映」といった項目が素案にあげられており、文書だけでなくなかなかのものですが、今、血肉になっていく瞬間を見たような気がしました。とはいえ女性消防団員募集は始まったばかり(令和6年4月)で、まだまだ道半ばである事も確かです。

「男女区別なくやっていきたいという気持ちもありつつ、やっぱり女性だからできるっていうこともあると思つています。例えば私だと、私は女性だから、相談する相手は女性の方が話しやすいとか理解して

もらいや話し話があると思つているので、女性団員として活動する中で、女性の意見の受け口になれるような存在になりたいなと」

河合さんの活動は、入団半年を経て、今、ここを進んでいます。

### ◆誰も活動しやすい環境へ「新時代の消防団」とは

女性消防団員の受付は基本、いつでもウエルカムですが、実は第一分団以外にはトイレや着替え室の準備が未だに整備されていないそうです。市役所地域安全課によれば、ハード面については、今後予定している詰所の長寿命化計画や今後の入団状況を踏まえ、必要に応じて対応していくこととします。

全国の女性消防団員率は3.5%(令和5年4月1日現在)だそうです。これを令和8年までに5%にもつていくことが目標とのこと。小金井市では現在、河合さんを含めて2名おられ、比率では2.9%になります。あとお二人ほど加入されれば目標達成ということになります。それには河合さんが仰つていたように消防団の存在の告知から始めなければならぬのかもしれないですね。そして、きたるべき大規模災害に備えるため、新時代の消防団には河合さんのように考える女性の力が求められます。

消防団はボランティアと思われがちですが、特別職非常勤地方公務員というれっきとした公務員であり、月額報酬とか出勤報酬といった形で給料が出ます。また退職報酬や公務災害補償などの制度もあり、学生さんだったら「学生消防団活動証明書」の発行とか、意外といろいろなことが充実しています。確かに訓練などもあり大変な面もありますが、日程のやりくりなどについては相談のつてもらえる余地もあ

るそうです。

### ◆終わりに

ジェンダー思想の浸透とともに、それに少女アニメとの相関を見出すような論文が、しばしばみられるようになりました。私が感じた少年の秘密基地に河合さんがおられたことは、少年漫画↓少女アニメという歴史の流れが私の中で今具体化したということなのでしょう。これが女性戦隊モノにまでなった時には、私が当初、排他的なオーラを感じた第一分団詰所のシャッターに「駐車禁止」ではなく、何か楽しくてウエルカムなものが描かれているのだろうことを夢想しつつ、本町5121-28の現場を後にしました。

本文を読まれた方、是非、あの建物前のあのオーラを体験してみてください。それはもうすぐと過去のものになるでしょう。

### 取材を終えて

外に出て、ふと見上げると、すぐ横が高架になっていきます。考えてみるとここは、その昔、小金井名物「開かずの踏切」だった場所です。冒頭、消防署から思いのほか近いなと思つたのですが、昔だったらお互い一番遠い場所同士だったので。つまり、第一分団は北を守り、消防署が南を守っていた訳です。高架化で、そういうこともなくなり、消防団は今、新たな役割への一歩を踏み出しているように見えました。(佐久間)

# 国際比較「異文化交流から見える日本とタイの違い」

【宮川 ラチャヤーさん】

日本でタイ語の先生をしているタイ出身の宮川さんに、日本とタイの文化の違いに関してお話を伺い、それぞれの異文化を知ると共に、私たちの生活を顧みることができました。

## ◆日本にきた経緯について

私はタイ北部のラムブーン県の出身で、バンコクのカセサート大学大学院で教育学修士を取得し、中学校及び高等学校のタイ語教師として勤務していました。2007年に日本におけるタイ語教育の実態調査のために初めて来日し、その時主人と出会いました。その後帰国し、2009年に主人と結婚し再度来日、2011年に武蔵野市国際交流協会にて市民に対してのタイ語教室で教師を務め、タイ語教室終了後も自主サークルにて、タイ語の教育活動を続けています。そして、2024年より東京農業大学にてタイ語の授業を担当しています。



取材に応じる宮川さん

20年程前のタイでは、今ほど日本の情報がありませんでした。当時、NHKの連続テレビ小説の「おしん」のドラマがタイで人気だったこともあり、来日するにあたっては、周りのひとから「日本はヤクザが沢山いて危ないからやめた方がいいよ」と言われました。しかし、日本を訪れた時は、日本は素晴らしい国だなと感じ、日本人の働き方に驚いた面もありますが、日本に長くいてもいいかなと思うようになりました。

## ◆タイからみた日本の食文化

私は、日本の文化は全体的にタイの文化と似ている部分があると感じています。ただ、日本文化の方がより繊細で、細部にまで気を配る傾向が強いように思います。そうした日本人の細やかな心遣いに、私はとても魅力を感じています。

日本の文化から学んだことの一つは、食べ物に対する意識と大切にしている姿勢です。日本では食べ物や食材を大切にしていると思います。また、食文化に対して深い敬意と関心を抱いており、単なる味覚や栄養価にとどまらず、盛り付けの美しさ、全体の調和、そして食事における礼儀作法に至るまで、細部にわたって心を配っていることが特徴だと思っています。

また、日本の食卓におけるマナーは、食事の前には「いただきます」、食後は「ごちそうさまでした」と言葉を添え、胸の前で手を合わせる習慣があります。これは、タイの「合掌」にも似た、感謝の



ナムギャオは宮川さんの地元タイ北部の伝統的スープ

気持ちを表す所作です。このような習慣からも分かるように、日本人にとって「食べること」は単なる栄養補給ではなく、命あるものへの敬意や、食事を用意してくれた人への感謝、そして自然や社会に対する責任と愛情を表す大切な行為だと思っています。

## ◆タイと日本の生活文化の違い

私が日本の社会において素晴らしいと感じたことは、日本人の時間厳守の姿勢、職務に対する高い責任感、ならびに規則を遵守する態度です。そういった点にタイ人は深い敬意を抱いています。公共の場における秩序ある整列や、清潔な環境を維持しようとする意識は、特に印象的です。

また、日本人の礼儀作法や社会的マナーには、敬意を表す行動が多く見られます。たとえば、お辞儀による挨拶、敬語の使用、そして対立を避ける配慮などが挙げられます。これらの文化的特徴は、タイ人に

とって非常に魅力的であり、学ぶに値するものと捉えられています。そして、日本では商品の陳列、料理の盛り付け、店舗での接客など、あらゆる場面において細部にまで心を配る姿勢が見られます。その丁寧さやこだわりは、タイの人々は驚きと感銘を受けることが多く、日本人の細やかな気配りに深い敬意を抱いています。

一方で、私が日本の社会において意外に感じたこと、違和感を感じたことは、多くの日本人には内向的な傾向が見られ、近隣の方々と積極的に交流することが少ないように思われることです。また、仕事によるストレスを強く抱えている方も少なくありません。こうした状況は、親しみやすさや社交性を重んじるタイ社会とは対照的であると言えます。また、静けさや感情表現の控えめさについてタイ人の中には、日本人は感情を率直に表すことが少ないと感じる方もいます。例えば、直接的に褒め言葉を伝えなかったり、個人的な話題に触れることを遠慮したりする傾向があるため、初対面の段階では距離を感じる場合があります。

都市部ではプライバシーが重視されているため、ご近所付き合いがほとんどなく、エレベーター内でも会話を交わさないことがあります。こうした静かな雰囲気に対して、タイ人の中には「少し静かすぎる社会だ」と感じ、タイ特有の温かみが欠けているように思う方もいらっしゃいます。

日本社会には、表面的には穏やかで秩

序正しく見える一方で、内面には多くのストレスが潜んでいるように感じます。仕事に対するプレッシャーや、社会からの期待、そして失敗への恐れなどが、人々の心に大きな負担を与えているのではないのでしょうか。

### ◆仏教国の暮らし

タイでは国民の約9割が仏教徒で上座部仏教が主流となっています。日本のお坊さんと違うところは、日本ではお坊さんが普通に家庭を持ち、一般的な生活を送っています。一方でタイでは袈裟を着て、靴も履かないで、家庭も持てません。車も運転することができず、一日一食の生活をします。一般の人とは違う別の世界に住んでいる特別な人と考えられており、バス、電車にはお坊さん優先の席があります。学校では仏教の科目があり、学校や公共機関では毎朝、国家斉唱が行われ、同時に仏教的な読経や僧侶の説法を聞く習慣が広く根付いています。

タイの4月のお正月は、水かけ祭りとして大盛り上がりします。タイの水かけ祭り「ソンクラーン」は、毎年4月13日から15日に行われるタイの旧正月のお祭



王室の守護寺院 ワット・プラ・ケオ

りで、世界的に有名なイベントです。仏像や年長者に水をかけて清める伝統から発展し、現在では街全体が水鉄砲やバケツでびしょ濡れになる大規模なお祭りになっています。タイのお正月の賑やかさに比べ、日本のお正月は静かで、お店も開いてないところが多く、タイではお正月に日本を訪れるのは避けた方がいいと言われています。

### ◆日本とタイ社会の違い

タイ社会では、知的労働は社会的身分が高く、肉体労働者は低く見られる身分社会で、どこの学校を卒業したか、どこの会社で働いているか、また弁護士や医者、先生などの社会的身分の違いを重視します。

私がタイで先生をしていた時に、清掃のおばさんと親しく話していたら、防犯カメラでそれをみていた校長先生に身分の違うことを理由に会話を注意されたことがあります。生活の厳しい地方からバンコクの都会に来て、学歴がなければ肉体労働など厳しい仕事しかありません。それに対して、日本は身分制度がなく、皆さん平等に会話ができて良い社会と感じています。

経済的に厳しいこともあり、タイの女性は結婚しても仕事を続けます。家庭では女性の方が立場的に強く、経済的な財布は女性が管理していることが多いです。また、タイでは年金制度が十分ではないことから、年離れた両親は家族で面倒をみます。施設に入れたら「あなたは死んだら地獄に落ちる」という教育をされています。また、結婚することで、選択制ではあるものの、夫の苗字になることが多い家族制度です。厳しいこともあり、最近では結婚しない女性が増えて、少子

化問題も深刻になっています。

### ◆タイ社会における男女共同参画

政治への参加をみると、近年、女性は国政において一定の役割を果たすようになってきており、例えば衆議院議員として選出されるなど、その存在感は徐々に高まっています。しかし、男性に比べるとその割合は依然として低いのが現状です。

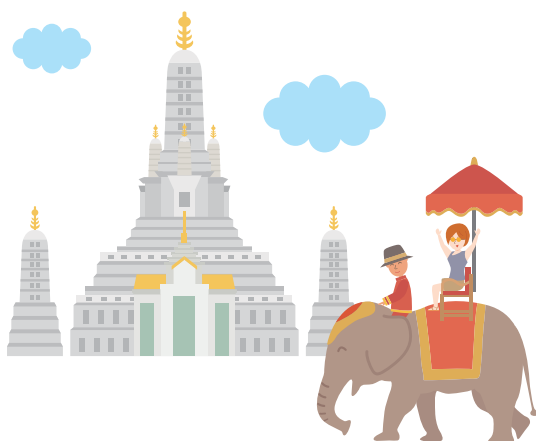
また、経済への参加でみると、タイの女性は労働市場において重要な役割を担っており、2021年には約1,725万人、すなわち15歳以上の女性の約59.7%が労働力人口として数えられ、女性の労働参加率は高くなっています。

教育と能力開発については、近年、タイの女性は教育の機会が広がり、教育機会の平等性が比較的高く、男性と同様に様々な職業に就くことが可能となりました。政府も女性の役割を推進するための政策を打ち出しており、たとえば「女性の役割開発基金」や、地域における女性リーダーの育成研修などが挙げられます。こうした前進が見られる一方で、国家レベルの委員会など、高位の意思決定機関における女性の参画は依然として限られています。私は、伝統的な価値観や性別による固定的な役割分担が、平等な社会参加の障壁となっていると感じています。

### ◆将来の抱負について

私の趣味は、裁縫や刺繍をすることです。そして日本語の新聞(子供新聞)を読むことです。静かな時間の中で、好きなことに集中するのがとても好きです。日本に滞在している間は、できる限り日

本語や日本文化について深く学び、理解を深めたいと考えております。将来、タイで人生の後半を過ごすことになった際には、これまでに得た知識や経験を次の世代へと伝えていきたいと願っております。将来的には、タイの田舎の雰囲気を感じていただける、こぢんまりとしたアットホームなホームステイを開きたいと考えています。日本人の方や友人をお迎えし、言語や文化について学び合える場をつくりたいと思っています。



### 取材を終えて

微笑みの国と言われるタイの異文化を知ることができました。自国改めて知ることができました。自国の文化を大切にしながら、異文化交流を通して、新たな視点を得ることはとても大切なことだと思っています。(塚田)

# 「能楽の歴史を通してジェンダーを考える」

## ― 女性能楽師津村紀三子を師と仰ぐ津村禮次郎氏が語る能楽の歴史 ―

### 【能楽師 津村禮次郎さん】

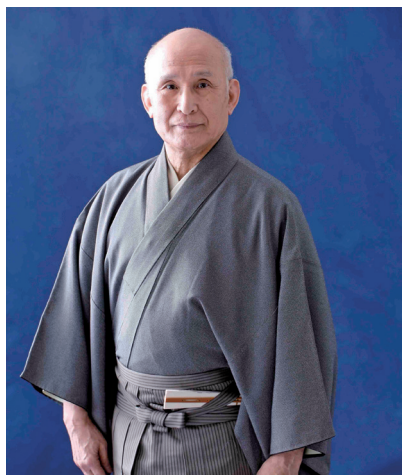
真夏の風物詩となっている小金井公園での「薪能」は、多くの人々を幻想的な世界へと誘い魅惑します。

この薪能を演出しているのは、小金井市在住の能楽師で重要無形文化財に認定されている津村禮次郎さん。日本を代表する古典芸能「能楽」は、近年、ジャポニスムとして海外においても愛好者が増えていると聞きます。

また男性社会と思われている能楽の世界にも、近年女性の進出が著しいということ。能楽には興味はあるものの、なかなかそれに接するチャンスが少ない人々に向けて、この度、津村さんにインタビューを行いました。

#### ◆ 能楽に興味を抱いたきっかけ

私は、1942年3月、北九州市八幡生まれで、当時3歳のころ空襲による大火事に追われて、祖母に背負われて防空



壕に逃げ込んで怖かったという記憶があります。当時北九州市に原爆を落とす予定であったものが、悪天候のために変更され長崎に落とされましたが、もしそうでなければ私はこの世に存在していなかったかもしれません。

私は子どものころから絵を描くのが好きで小・中・高と美術部に所属して、高校のころには全国の学生油絵コンクールにしばしば出品し入選していました。

東京に出たいという気持ちが強くて、自由でアットホームの雰囲気知られた一橋大学経済学部に入學しました。入学後先輩に誘われて一橋大学観世会という学生サークルに所属しました。能楽の持つ音楽性、身体的表現、能面などに興味を感じて入部しました。

大学祭の折に花月という少年能を演じることになり、後の師匠津村紀三子（1902〜1974）の指導を受けたことをきっかけに、個人的にも稽古をつけてもらううちに能の世界をもっと深く知りたいという気持ちが強くなりました。大学4年生の時に小金井市本町3丁目にあった師匠のお宅に下宿し、そこで師匠の能関係の仕事を手伝っていました。

当初は就職する予定でいましたので、大変迷い悩みましたが、能楽師になろうと決意をしました。能楽師の家の生まれでもないのに、周囲、特に父親から大反対を受けましたが、師匠が暖かく受け入れてくれたこと、師匠に子どもがいなかったこともあって養子となり津村姓を名乗ることになりました。

#### ◆ 能楽師としての活動の展開

私が32歳の時に師匠が心臓発作で急死し、享年72歳でしたが、その後を引き継ぐことになりました。自分自身の修練と能楽の会の維持に追われ大変苦労をしましたが、40歳を過ぎて大役を演じられるようになり、周囲も一人前の能楽師として認知してくれるようになりました。

44歳のころ小金井市在住の作家・エッセイストの林望先生と交流するようになり、林先生も本格的に能楽の勉強をされるようになり、能楽に関する著書を多く出され、私の演じる能楽のプログラムに解説文を書いていただくようになりました。小金井公園を舞台とする薪能も林先生と一緒に始めたもので、今年で47回目を迎えました。

その後、イギリス、フランス、ドイツなど海外諸国に向いて能楽を演じていますが、国によって受け止め方に特徴があり、例えばイギリスでは演劇の視点から、フランスではアミューズメントとして、ドイツでは哲学的思索の対象として捉えられているような気がしています。

今年の10月にパリの日本文化会館で「長崎の郵便配達」というタイトルで新作能を演じました。内容は、16歳の時に長崎で新聞配達をしている際に被ばくをし、重傷を負った谷口稜嘩（タニグチ・スミテル）氏―初代日本原水爆被害者団体代表―と元英国空軍パイロットでローマの休日の新聞記者のモデルと言われたピーター・タウンゼンド氏との交流実話（映



海外公演的一幕

画にもなっている）をもとに両者が亡霊となって現れて戦争の悲惨さ、平和の大切さを能楽という表現を通して訴える新作能で3回の公演とも超満員でした。

私自身、北九州市で危うく原爆の被害者になるところでしたので、自分ごととしてこのテーマをとらえ演じています。このように能楽は700年前に形作られ完成した芸能ですが、現代的テーマで今日でも古典的なフレームを活用して演じられているわけです。

◆能楽はどのような過程を経て今日の姿になったのか

能は世界最古の舞台芸術と言われてい  
ます。奈良時代、舞踊や歌謡、曲芸など  
を演じる散楽が大陸から伝わり、これが  
受け継がれるうちに猿楽と言われるよう  
になります。

農村の民俗芸能であった田楽、秋祭り  
で神社に奉納される神楽、舞楽、宮廷で  
演じられる伎楽や雅楽などは、みな能と  
同じ源流にあると言われていきます。南北  
朝から室町前期に観阿弥、世阿弥親子が



他ジャンルとのコラボレーションにも多数取り組む

猿楽を発展させ、歌や舞を主とする能が  
確立されました。元々は、庶民の芸能で  
あった能は、武士の間で愛好されるよう  
になり、秀吉は自ら演じたと言われてい  
ます。  
能は、江戸時代になると、將軍家や大  
名が保護する武士の芸となり、武士の式

楽として格式化化されていきます。能と狂  
言は、もともと一卵性双生児であって、  
会話や滑稽や面白みの方に特化したのが  
狂言、詩的な要素や音楽的な要素に特化  
したものが能であると言えるでしょう。  
明治時代になると、先進国並みの高い  
レベルの文化を有する一流国として伝統  
文化の能楽をアピールするために、芝の  
能楽堂、現在の靖国神社の能楽堂などが  
作られました。  
このように能は、時代の進展とともに  
変化してきているものの、その根本にお  
いては世阿弥によって室町時代に完成さ  
れたものをそのまま継承してきています。

◆能楽は男性のための芸能なのか？

もともと能には男女の差別は存在して  
いません。世阿弥のころには、女猿楽師  
が存在していました。江戸時代において  
も、一般庶民の中には、特に地方や農村  
においても能を演じたり、能の台本であ  
る謡を謡うことは珍しくありませんでし  
た。

但し、江戸時代の武士階級においては、  
武士の式楽となっていましたので、そこ  
には女性が入れない、明治時代になると  
男尊女卑の傾向が強まりフォーマルな場  
においては、男子の芸能というイメージ  
が出来上がりました。そのイメージを現  
代でも引きずっている傾向があります。



津村紀三子氏  
を着る面にて屋楽



ご自宅内の舞台

明治から大正時代にかけて女性の権利  
の主張が強まる中で、平塚雷鳥や松井須  
磨子も能を演じたと言われていきます。

私の師匠、津村紀三子は、女性が舞台  
に立つことさえ困難だった時代から研鑽  
を積み、戦後の民主化の波の中で、女性  
の能楽師の地位確立に心血を注ぎました。  
1948年（昭和23年）、能楽協会の設  
立の際に、彼女は女性能楽師の公認を強  
く働きかけ、ついに「女性の正会員」と  
しての道を切り拓きました。これは単な  
る権利の獲得ではなく、芸術の質の向上  
には性別を問わない多様な担い手が必要  
という信念に基づいたものでした。現在、  
能楽界では女性能楽師の活躍が目ざされ、  
その存在感が増しています。

2026年1月時点では、能楽師の14%  
程が女性（能楽協会登録人数は約1,100  
名）で、過去に比べると増加傾向にあり、  
特に若い世代で能楽師の家系を継ぐ女性が  
増えてきています。

現代の女性能楽師は、伝統的な舞台に留  
まらず、現代的な表現、海外公演、教育活  
動など多様な分野で活躍しています。  
しかし、女性能楽師は依然として少数派  
であり、舞台上に立てる機会は限られていま  
す。その一方で、家族や師匠の理解と支援、  
女性能楽師同士のネットワークの構築、若  
手支援団体や育成プログラムの増加など、  
活躍できる環境やサポートが徐々に整備さ  
れてきています。  
もし市民の皆さんの中で能楽について興  
味を抱かれる方がおられましたら、喜んで  
お話をさせていただきます。



取材を終えて

津村さんのお話に引き込まれ  
て、予定されていた対談時間は  
あっという間に過ぎてしまいまし  
た。

これまで近寄りがたいと思っ  
ていた能楽の世界が、急に身近なも  
のに感じられるようになり、能楽  
を通して日本の伝統文化の根底  
にあるものをもっと知ってみたい  
と思うようになりました。

（伊集院）



# 「第6次男女共同参画行動計画」

## -令和6年度 推進状況調査の報告について-

市では、男女共同参画社会の実現のため、令和3年3月に第6次男女共同参画行動計画を策定しました。

本計画は、計画期間を令和3年度～令和7年度とし、

基本理念を「人権尊重とワーク・ライフ・バランスを軸とする 男女共同参画の実現をめざして」と定めています。

この基本理念を具体的に推進していくため、

基本目標Ⅰ「人権が尊重され、多様性を認め合う社会をつくる」

基本目標Ⅱ「ワーク・ライフ・バランスの実現した暮らしをめざす」

基本目標Ⅲ「男女共同参画を積極的に推進する」と、3つの基本目標を掲げています。

### ◆令和6年度推進状況調査結果

基本目標Ⅰでは95事業、基本目標Ⅱでは52事業、基本目標Ⅲでは19事業、合計166事業の実施内容等について調査しています。

### ○具体的な取り組み

#### 〈審議会等女性の参画推進〉

男女共同参画社会の実現のためには、政策・方針決定の場への女性の参画が進むことが重要です。

また、審議会等の委員構成は、男女に偏りがないように配慮することが必要です。改選時には、できるだけ女性委員の登用を図るなど、様々な分野への女性の参画拡大に努めています。(下表)

#### 〈男女共同参画情報誌「かたらい」発行〉

男女共同参画施策の推進のため、市民編集委員制を導入し、情報誌「かたらい」を発行しています。

令和6年9月の第60号は「家族の在り方について考える」、令和7年3月の第61号では「多様性・自分らしく輝く」を特集しました。

今後も、男女共同参画に関する情報を発信し、意識啓発を図っていきます。

#### 〈こがねいパレット〉

男女共同参画社会実現のための啓発事業として、講演会等を市民実行委員が企画、運営しています。

令和6年11月2日に「みんなとちがってもいいじゃない」をテーマに開催し、こがねいパレットに賛同する市民団体の紹介等を行いました。

「こがねいパレット」には、「いろいろな色を持つ、いろいろな人たちが自分の色を

大切に、出会い、交流し、それぞれの色を認め合い、ときには、いくつかながら、誰もが楽しく幸せに暮らせる豊かな社会を作り出そう」という願いが込められています。

### ◆男女平等推進審議会からの提言

令和7年3月に、市の附属機関である男女平等推進審議会から、本計画の推進について提言をいただきました。提言内容についての詳細は市HPをご覧ください。

市HPはこちら



### ◆その他

報告書および提言書は、情報公開コーナー(市役所第二庁舎6階)、図書館本館、企画政策課男女共同参画室(市役所本庁舎2階)および市ホームページで閲覧できます。



(表) 審議会等女性の参画率

人数等	小金井市 (令和7年4月1日現在)				多摩26市 (令和7年4月1日現在)				東京都 (令和6年4月1日現在)			
	機関数	委員等の総数	女性の人数	女性比率	機関数	委員等の総数	女性の人数	女性比率	機関数	委員等の総数	女性の人数	女性比率
審議会等												
行政委員会 (教育委員会ほか)	6	31	9	29.0%	132	777	148	19.0%	9	96	28	29.2%
附属機関 (男女平等推進審議会ほか)	57	674	226	33.5%	992	13,053	4,131	31.6%	103	1,267	606	47.8%
その他審議会等 (市民協働推進委員会ほか)	30	327	153	46.8%	701	10,550	4,196	39.8%	127	1,089	505	46.4%
管理職の在職状況	—	65	13	20.0%	—	2,620	482	18.4%	—	2,943	539	18.3%

令和7年度 区市町村男女平等参画施策推進状況調査報告より

## 令和7年度 性の多様性への理解促進講座を開催

令和8年2月7日(土)に令和7年度性の多様性への理解促進講座「LGBTQから防災を考える～すべての人にとって安心・安全な地域づくり～」を開催しました。今年度は、認定NPO法人ReBitの三戸花菜子(さんどかなこ)さんに講演いただきました。

講座では、まずは性のあり方(SOGI)の基礎知識を解説。「LGBTQは見た目では分からないが、身近に確実に存在する」という前提を共有したほか、災害時においてLGBTQの方が困る事例として「同性パートナーが家族として認められず安否確認が困難」「男女別のトイレや更衣室が利用づらい」「ホルモン治療薬が入手できない」などが紹介されました。

また、「災害時は平時の困りごとが露呈する」からこそ、平時から地域のなかにはLGBTQの人がいるかもしれないという意識の醸成と制度や取組のなかにLGBTQの人が包摂されているかの検討や見直しが必要であるとの説明がありました。

さらに地域としてできる対策として、「避難所名簿の性別欄を自由記述にする」、「個室スペースを確保する」といった運営側の工夫に加え、私たち一人ひとりが「アライ(理解者・支援者)」として行動することの重要性が訴えられました。

講演の中では、周囲の人と意見交換する時間もあり、和やかで活気あるムードに包まれました。

「LGBTQに限らず、高齢者や障害者、外国人など、すべての人にとって住みやすい地域というのは誰にとっても住みやすい地域につながる」という三戸さんの言葉もあり、災害への備えとして、物資だけでなく、多様な隣人を想像し尊重する「心の備え」の大切さを学ぶ貴重な機会となりました。



## 性の多様性への理解促進 パネル展を開催

令和8年2月2日(月)から12日(木)まで、市役所第二庁舎1階で性の多様性への理解促進パネル展を開催しました。第6次男女共同参画行動計画では、基本目標の一つに「人権が尊重され、多様性を認め合う社会をつくる」という目標を定めており、パネル展はこの目標実現のための取組の一つです。



## パートナーシップ宣誓制度 周知リーフレットを発行

小金井市パートナーシップ宣誓制度は、令和7年10月に5周年を迎えました。多様な性への理解を深め、性的マイノリティの方が抱える生きづらさを解消していくための制度で、性的マイノリティの方が互いを人生のパートナーとして共に生活をしていきたいという気持ちを受け止めるものです。このたび、市民・事業者等の皆様に本制度の趣旨を理解していただけるよう、リーフレットを発行しました。



## 「かたらい」について読者の方から意見・感想等を募集しています。

氏名(ふりがな)、ペンネーム(記載がない場合はイニシャルとします)、連絡先を明記し、直接、郵送、FAXまたはEメールで企画政策課男女共同参画室へご提出ください。 ※一部抜粋して掲載させていただくことがあります。

〈提出先〉〒184-8504 住所不要 企画政策課男女共同参画室 FAX: 042-387-1224

✉s010303@koganei-shi.jp

## 編集後記

仕事であれ芸術の世界であれ、男性の領域と思われている世界に女性が足を踏み入れることは、かつては多大な難難を伴ったものであったが、今日においては、ごく自然体で軽やかに踏み入れる女性が出てきていることをインタビューを通じて知りました。今後は男性、女性を問わない多様な担い手による創造的な活動領域が社会にさらに広がることを大いに期待しています。  
(伊集院 正)

「かたらい」はどれ位読まれているの? 「感想などは寄せられていません」とつれない報告。男女雇用機会均等法が施行されて40年。もしかしたら、男女にかかる啓発事業は、そろそろ発展的解消の時期かも? と思いつつ「かたらい」に寄せ集う一期一会に感謝。  
(佐久間 昌己)

青木さんへの取材を通して、防災とは特別な訓練や知識・設備だけで成り立つものではなく、日々の備えや、顔を合わせ言葉を交わす地域のつながりそのものなのだと感じました。いつもの暮らしを大切にすることが、いざという時の力になる——そんな気づきを読者の皆様と共有できればと思います。  
(真保 美帆)

時代は変わり、日本社会は多様な人々、障害者、人種、価値観、性があり、男女共同参画だけの話ではありません。今後に必要なことは、多様な生き方をそれぞれが理解し、共生することが重要だと感じました。  
(塚田 悟)

取材にご協力いただきました皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。  
(男女共同参画室)

「かたらい」は、公募による市民編集委員が、企画・取材・執筆を行っています。